

青森県に東北新幹線が到達してから20年が経った。2002（平成14）年に八戸駅が開業し、2010（平成22）年に新青森駅が開業、現在青森県から東京まで3時間ほど座っていれば到着できるようになった。では、昔の移動はどうだったのだろうか。三戸南部家26代当主南部信直が、

1597（慶長2）年12月6日、豊臣秀吉へ新年の挨拶を兼ねて、京都伏見に向けて上洛している途中で、国元にいる根城南部（八戸）家19代当主八戸直榮（1595年に死去）の妻となっていた娘・千代子に宛てた書状に、移動の様子が記されている。「とかく馬二のり候へ



南部信直 II 「南部氏歴代当主画像」 もりおか歴史文化館所蔵

ハ、右之手足中風氣二候へ共、つらくハなく候、」(ともかくにも馬に乗っている)ので、右の手足が痺れているけれども、辛くはない。これは、武蔵国久喜(埼玉県久喜市)から出した書状の一文である(『青森県史』資料編中世I-244)。ここから、馬で移動していたことがわかり、

移動の苦労と土産

滝尻 侑貴

(八戸市立図書館 歴史資料グループ 主査兼学芸員)

長時間の乗馬で手足のしびれも出ていたようである。

日程に関しても、同年11月17日に、鳥谷崎(岩手県花巻市)から出した書状が残されており、花巻から久喜まで19日かかったことがわかっている。なお、目的地の京都伏見には12月25日に到着しており、久喜から19日かかっている。

道に關しても、「自是京へハ道も能候、天氣も此方ハ三月之やう二候間」(久喜から京都へは道も良い、天気も3月の様だ)とあり、「路次之あしき分通候間、はやく京へ近く候」(道の悪いところは通り終わったので、早く京都へ行く)と記されている。

おり、そのうち孫(千代子の娘・のちの清心尼)に80個、息子利直(千代子の弟・のち27代当主)に70個と分けて渡すよう伝えてい。今でこそ青森県でも売っている蜜柑だが、かつては茨城県が栽培の北限とされており、地元にないのを土産としたようだ。

ここでは道が悪いというのは、道の整備がされていないというよりは、季節柄積雪があり、移動しづらかったことを指しているのだろう。久喜の天気は、南部領でいう3月の様だとも伝え、以降は京都へ早く着くと予想しているので、雪の有無が行程に影響を与えていたことが想像される。

さらに9日にも追加で蜜柑を送り、京都に到着してから「関東の孫方へミかんを越候、届候哉」(関東から孫へ蜜柑を送った、届いたか)と、確認の手紙を送っている。

現在であれば、青森から6時間くらいで京都へ行けるが、当時は1か月半以上の月日が必要だったのである。

他にも、誂え物(オーダーメイド)、徳川家康から貰った羽織の襟や唐織、厚板(地厚で文様を織り出した織物)、縫箔(刺繍と金銀の摺箔で文様を表した生地)などを送っている。

また、同資料には土産の記事もある。信直は、久喜から蜜柑150個を送って

現在、東京駅の地下で多様な土産の中から家族や職場へ購入できるが、信直は行く先々で土産を選び、孫娘へ送っていたのである。